

がん口コモの展望

令和という新しい時代を迎えた我が国は、社会全体の高齢化に加え、医療界全体ががん患者数の増加という大きな変化に直面しています。今や国民の2人に1人が生涯でがん罹患するだけでなく、長期間がんと共に生活する担がん患者が激増し、まさに日本は「がん時代」を迎えています。

この状況において、「がん」から距離をおいていた整形外科全体が医療界全体からのニーズに応えて、がん診療に取り組もうとする活動が「がんとロコモティブシンドローム（がん口コモ）」です。

これまで整形外科医は、がんは専門外の領域として関与を避けてしまう傾向がありました。その結果、がん患者であるという理由で、運動器疾患の適切な治療を受ける機会を逃していることが少なくありません。2018年4月に実施したがん診療実態調査アンケートでは研修施設の8割、がん診療拠点病院でさえも6割の整形外科が「骨転移を含めてがん診療には関わっていない」、「今後も関わる予定はない」と答えています。

がん診療において、整形外科医に求められているのは「がんを治す」ことではありません。がん患者が「動ける」状態を維持することです。がん患者が最期まで自立した自分自身の生活を送るためにも、就労を維持するためにも、そしてがん治療を継続するためにも、「動ける」ことがとても重要です。しかし、多くのがん診療医は「動ける」ことの意義に気づいておらず、また「動ける」ようにする手段を持ち合わせていません。

がん診療には国民的関心が向けられています。がんとの共存方法を模索するパラダイムシフトが進むがん診療において、がん口コモの概念が普及し、運動器診療ががん患者のQOL向上に大きく貢献できることが示されれば、運動器診療の意義が向上していくと感じています。

本特集では様々な専門領域の第一人者に、がん口コモ活動が、各領域で何を変えていくのか、どんな展開が期待されるかについて執筆していただきました。がん診療という、整形外科が潜在能力を発揮できるニューフロンティアについて考えるきっかけになることを願っています。

(河野博隆・森岡秀夫)